

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 151 回 優しいお店づくりはソフトから～本当のバリアフリーとは？

2006.5.28

先日、ある人から聞いた話である。某ホテルで、粛々と結婚披露宴が行われていた。メイン料理のフィレステーキを楽しんでいたその時、突然お年寄りが苦しみながら倒れてしまった。119 番し、その救急車が到着するまでの 6 分間、不幸にも、ホテルスタッフも、参列者も誰一人救命対応ができなかった。なすすべもなくただ、心配そうに見守るだけの 6 分間、肉を喉に詰まらせたお年寄りは、残念ながら、返らぬ人となってしまった。僅か 6 分間の対応が生死を分けてしまった、いたたまれない例である。

高齢者や身障者に優しいお店づくりを、運動として広めていきたい...そんな強い意思で行動を起した若手経営者達がいる。わが街（熊谷市）を中心に、ダイナミックな美容室チェーンを展開する細田光男氏（電髪倶楽部）、市民活動を支援する NPO の出浦尚明氏達のグループである。（「やさしいお店プロジェクト」）

バリアフリーといえ...階段をなくしスロープにする、至る所にしっかりした手摺りをつける、ついそんな発想になりがちである。もちろんそれも重要。だが、ハード的対応をしたからといって、本当にバリアフリーになるのだろうか？ 高齢者や身障者に優しいお店として、十分な対応ができるのだろうか？

細田氏達の運動は、この疑問の解消から出発したといえる。ハード的対応がバリアフリーだと考えている人は、うちはこれで大丈夫と思っているかもしれない。そこで実際に緊急事態が発生した時、果たして本当に有益な対処ができるのだろうか。非常事態が起きないよう、お年寄りや身障者の気持ちになって、お店の中や周辺環境を見直せば、自分達の動き方や考え方を変える必要があるかもしれない。むしろ、そんな精神面、心理面のソフト的認識の充実と、救急対応の学習と訓練を習得していく事が、大切ではないだろうか。

彼らの主張はそこにあった。ソフトから入ったバリアフリーは、例えハードが完璧でなくとも、何とか対処できる。余裕があれば必ず、ハード対応をするものである。逆に、ハード対応だけでバリアフリーと思っている人は、実際の緊急事態にただ慌てるだけかもしれない。冒頭のホテルは、ハートビル法適法の、バリアフリーを施した、施設的には立派なホテルであった。

緊急・非常事態は何も身障者や高齢者に限ったことでない。何時、我々もその当該者になるか、全く予測できないのが現実である。せめて、役所や病院、街なかにかくつか AED（自動体外式除細動器）があり、高齢者・身障者に優しいお店で溢れている商店街、駅や銀行や量販店には、ニコニコした介護ヘルパーが親切に対応してくれる...そんな「優しさ」いっぱい街、これからの日本には必要だと思いつつ、彼らの運動を応援していきたい。